



座談会

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

夏期座談会

SDGsと電材業界の未来 ～持続可能な明るい未来を創るために～

のSDGs(Sustainable Development Goals)：

持続可能な開発目標)が2015年の年に国連サミットで採択され、以降、世界共通の目標である17のゴールを目指して日本も積極的に取り組んでいます。そして、国や地方自治体だけではなく企業、団体、個人もさまざま形で参加し、目標達成に貢献する」とが求められています。「ゴールまで、あと8年。ちょうど中間地点に差し掛かつた今、サステイナブルな未来について考えます。

のSDGsについてと

溝脇　皆さま、本日はお暑い中お集まりありがとうございます。ありがとうございます。司会進行を務めます中谷電機の溝脇です。どうぞよろしくお願ひいたします。

- ◆ 参加者／木村 雅英（木村電機株式会社／市場活性化課課長）
米倉 彦之（株式会社美賀本／総務副委員長）
- 堀 久志（福西電機株式会社／福利厚生部副委員長）
服部 浩士（五十嵐電機株式会社／経営情報部副委員長）
- 奥田 康信（桃陽電線株式会社／財務副委員長）
眞規（中谷電機株式会社／広報副委員長）
- ◆ 司会／溝脇 真規（中谷電機株式会社／広報副委員長）
- ◆ 事務局／松西 利勝



▲木村雅英 市場活性委員長

言葉は、すっかり定着した感があります。その内容もある程度は、広く社会に浸透しているのではないでしようか。国連での採択から7年、ゴールまであと8年。折り返し地点に差し掛かった今、持続可能なより良い世界を実現するために私たちは何をしなければならないのか——。あらためて考えてみたいと思います。壮大なテーマではあります、皆さん、それぞれの立場でざつくばらんにお話しください。

では、最初に木村さん、SDGsにどのような印象をお持ちですか。

木村 17のゴールがありますが、環境に関する目標などは、我々がこれまで取り組んできたISO14001と似た印象です。従つて、環境関連についてはISOから引き続き実践している企業が多いのではないでしようか。貧困や飢餓はもちろんなくさ

なくてはいけませんが、これこそ世界が力を合わせて取り組むべき課題でしようし、企業人としては、私はまずESGが重要だと考えています。皆さんご存じの通り、Eは環境(Environment)、Sは社会(Social)、

Gはガバナンス(Governance)、統治や管理といった意味ですが、企業がESGに配慮した事業活動を推進することで、結果としてSDGsにも貢献できるはずです。

溝脇 ありがとうございます。続いて、服部さんはどのようにお考えでしよう。

服部 環境ISOは、これがないとこれらは商売できないと聞いて、私たちも取り組みました。けれど、いつの間にか一種のブームが終わったように形骸化してしまった印象があり、SDGsもその二の舞を演じはしないかという警戒感を抱いています。それと、こういつてはなんですが、17のお題目がきれいすぎて、薄汚れた僕にはどうもなじまなくて(笑)、個人的には少々苦手意識があるというのが正直なところです。

溝脇 なるほど、ありがとうございます。

米倉さんはいかがですか。

米倉 私は親父の跡をついでこの世界に入りました。それまで異業種で働いていた私は、この業界の「もつたいない精神」や始末検約をきちんとする仕事ぶり、社員も取引先もみんな家族といったアットホームな



▲米倉彦之 総務副委員長

雰囲気に感銘を受けたものです。それらは

すべて、SDGsに通じるもののような気がします。一方、業界の大きな課題といえば、ジェンダー平等を実現する以前に女性が少ないことでしよう。先日の総会でも当社の営業部長と本日司会の溝脇さん、女性は二人だけでした。まだまだ、私たちがしなければならないことは多いと思います。

溝脇 そうですね。では堀さん、お願いします。

堀 持続可能な開発目標は素晴らしいもの

ですし、それに貢献することは意義あることだと思います。しかし、経営者としては

未来だけでなく日々のこととも考えなければなりません。SDGsとビジネスは本来別

のものかもしれません、企業にしてみればSDGsに関する取り組みと事業活動が両立できれば、SDGsが会社の活性化や発展につながれば、それにこしたことはありません。

堀 ありがとうございます。奥田さんのお

溝脇 ありがとうございます。奥田さんの

ところは、いかがですか。

奥田 当社は細々ながら昭和20年から商売をさせていただいておりまして、私が入社したのは10年前ですが、その頃でもまだ旧態依然と申しますか古い体質が残つていて、新しい取り組みなど程遠いような会社でした。それでも最近はSDGsなどに少しずつ取り組むうち、やればできるものだなど。業績も堅調に推移していますし、工夫次第ではさらに企業活動に生かせるのではないかと考えています。

SDGsに関する各社の取り組み

溝脇 皆さん、ありがとうございます。では、一巡したので質問を変えましょう。小さなことでも結構です、皆さんの会社のSDGsに関する具体的な取り組みを教えてください。

奥田 SDGsに限らず、会社の取り組みは上から押し付けてもうまくいかないものですが、当社では意外に若い社員が積極的です。若手が中心となつてISO認証取得



▲堀 久志 福利厚生副委員長

に向けて動き出したり、品質管理のスキルを問うQC検定を受検したり、そのための勉強も頑張っているようです。SDGsについても、私たちよりよほど柔軟に対応している印象です。

溝脇 SDGsでいえば「働きがいも経済成長も」という目標につながっていますね。

堀 当社は、一例ですが省エネという観点から、本社1階の受付のところにモニターを設置して建物全体と設備ごとの電力使用量を見える化・見せる化しています。使用エネルギーの状況を細かく把握することで削減対象が見えてきますし、社員の省エネ意識も向上します。このシステムを目にしたお客様からお問い合わせなどもいただき、ビジネスチャンスも広がっています。

また、EV関連設備の需要も高まってきています。自社営業車を一部EV化するなど、積極的に進めているところです。

溝脇 それは良い取り組みですね。ところで、福西電機さんといえば女性社員の活躍の場を広げるサファイアプロジェクトがありますけれど、状況はいかがですか。

堀 今、力を入れてているのは女性の管理職を増やすことです。ただし、これは一朝一夕にできるものではありませんし、管理職を任せられる人材に育つてくれたとしても、本人の希望も考慮しなければなりません。ゴールはまだまだ先ですね。

米倉 当社でも、紙・ごみ・電気を削減しましよう、お客様には環境配慮型の商品をおすすめしましょう、といったことは当然のこととして進めている他、雇用に関しても注力しています。女性従業員の比率は、派遣社員も含めると全体の約半分ですし、性別に関係なく60歳以上の従業員が全体の2割近くいて、活躍しています。管理職については女性が1割以上、外国人の管理職も1割以上となっています。

溝脇 女性管理職はすんなりと？

米倉 堀さんがおっしゃるように、能力はあるのに「管理職なんて嫌です」という女性もいます。もちろん説得は試みますけれど、押し付けになつてもいけませんから、そこが難しいところですね。でも、優秀な女性は多いと思います。



▲服部浩士 経営情報副委員長

服部 当社も、たとえば小さな子どもがいる女性社員の時短制度とか、みんなが働きやすい職場環境を目指すというのは、もはや当たり前のこととして取り組んでいます。それがSDGsにもつながっていると思いますし、そう考えると、企業活動のほとんどはSDGsの方向性と合致しているのではないかでしょうか。ですから、特にSDGsを意識せず、必要な施策を進めていくと、SDGsを意識せずに、個人的には考えていました。

溝脇 SDGsだからやるのでない、ということですね。なるほど、ありがとうございます。

木村 電機さんでは特に環境関連に注力なさっているのでしょうか。

木村 特にというわけではありませんが、我々は電設資材を取り扱っていますから、他の業界よりも環境やエネルギー問題に対して敏感でしょう。ISO14001の取り組みもありますし、少なくとも環境関連についてはSDGs以前から力を注いできました。

SDGsは国連サミットにおいて加盟国全会一致で採択されたもので、確かに17のゴールはどれも異論を挟む余地のないものだと思います。わかりやすくきれいな標題が並んでいますが、一つ一つを達成するのは並大抵ではないでしょう。これがすべてクリアできれば理想的な世界が生まれると思いますけれど、エネルギー問題一つをとっても先進国と発展途上国とでは事情が違いますし、経済成長と環境保全といった相反する問題もあります。「あちらを立てれば、こちらが立たぬ」ではありませんが、問題は互いに関連し合っていて複雑です。ともあれ、私たちにできることを精一杯やるしかないですね。持続可能な目標ですから、足るを知らなければ。先ほど米倉さんがおっしゃった「もつたいない精神」はどうやら、最近の日本は大量生産・大量消費・大量廃棄、使い捨て文化にどっぷりと浸かっている気がします。

木村 穴が開いた靴下も、自分で縫つて履ますか。

いています(笑)。

溝脇さんはどうですか。

溝脇 油残りの食器を洗うときは、いらぬ布で拭いてから洗うようにしていますよ。「海の豊かさを守ろう」に貢献しています

(笑)。

会社としては、うちはコンパクトな会社なので大きなことはまだできていませんけれど、17名のうち4名が女性で、そのうち2名がお母さんで、早く帰る日もありますし、学校行事などで抜けても、お給料から天引きなどはありません。そのぶん頑張つてくれてるので、他のみんなも応援しています。それから、該当する社員はまだいませんが男性の育児休暇制度もきちんと整備しました。あと、今後は太陽光発電などを社屋に完備して、省エネはもちろん、BCP(事業継続計画)対策もしっかりとないと考えているところです。

ゴールのその先を目指して

溝脇 では最後に、皆さんそれぞれの目標

をお聞かせください。SDGsは壮大なもので目標といつても難しいですけれど、目標性のようなものでも構いませんので。木村 SDGsに企業として取り組む場合は社内の意識統一が必要ですよね。当社が環境ISOに取り組んでいる頃は、社員全員がエコ検定などを受検していました。そうした社内教育を通じて個々のスキルと意識を高めるだけでなく、新入社員も古参社員も同じ意識レベルで同じ方向を目指すことが重要だと思います。細かな数値目標を設定することも必要ですが、いわば全社一丸となつて取り組む体制づくりが究極の目標といえるのかもしれません。

米倉 経済成長という観点で申しますと、不良在庫ですね。さまざまな理由から、どうしても発生するのですが、商社にとつては一番の無駄なので、これを何とかしたい。

木村 ファッション業界などはデッドストックをアウトレットという形で販売していますし、スーパー・マーケットなどの小売店では値引き販売といった方法がありますけれど、新しい製品やシステムが求められる



▲奥田康信 財務副委員長



▲司会の溝脇真規 広報副委員長



▲事務局 松西利勝

電材業界では、そうした販路は確かに難しうですね。

奥田 そうしたデッドストック情報を、大電材組合の中で共有できないものでしょか？たとえば、その在庫はうちなら売れるかもしれません、というような。

松西 確か、全日電材連が全国の商社の在庫を取りまとめて、ウェブを通じて発信していましたよ。

木村 「メルカリ」のようなフリマサービスの電材版といったスタイルも考えられますがね。ただし、転売するには製品試験が必要になりますけれど。

服部 電気設備の資材ですから、万一の事故や不具合が起こった場合、誰が保証するのかという問題がありますね。

溝脇 安全・安心が大前提ですかね。では、引き続きお伺いいたします。服部さん、今後の目標などは何かありますでしょうか。

服部 そうですね、当社は今年でようやく繰越決算金が終了いたします。ずっと赤字続きだった時代がありまして、繰越決算金をたっぷりいただいて代替わりをしたので

すが、この3月で終了と。来年度からは税金もきつちりと納めて、社会貢献ひいてはSDGsへの貢献に邁進していくことがあります。

奥田 当社のような規模の会社ですと、若い社員を募集しても、なかなか優秀な人には来てもらえない。どうしようかと悩みまして、ふと海外に目を向けてみると、たとえば東南アジアなどに優秀な人材が大勢いることに気づきました。これは、安い賃金で働いてもらえるという意味ではありません。私が見る限り、東南アジアの大学で学んでいる若者たちは、男性も女性も向上心があつて意欲的な人が多いように感じます。私たちが視点や考え方を少し変えれば、人材不足も解消できる、まだまだ活路は見いだせると思いました。今後は、その辺りのこと

をきつちりやつていきたいと考えています。堀 目標としては、やはりSDGsへの貢献と会社の発展の両立ですね。いうまでもなく社会貢献は企業としての大きな使命ですし、それが最近の若い人たちの働く意欲にもつながっていると感じます。そうした



取り組みで相乗効果を發揮して企業活動を推進していければベストではないかと思つています。

溝脇 最後に、組合として一言お願ひいたします。

松西 大電材組合としては、組合員の皆さまのビジネスチャンスが広がり、そして環境保全をはじめとしてSDGsへの貢献につながるような情報を収集し、発信すること。明るく、そして持続可能な未来を皆さんとともに目指すこと。これに尽きます。

リニューアルしたホームページもさらに内容の充実化を図つてまいりますので、今後ともよろしくお願ひ申し上げます。

溝脇 ありがとうございます。こちらこそ、どうぞよろしくお願ひいたします。

持続可能性を目指して社会課題の解決に貢献するSDGsの考え方は、「三方よし」の精神と同じだと思います。「SDGsを取り組みたいのに、何からはじめていいか分からぬ」と思われる方も少なくないと思いますが、新しく何かをはじめるのではなく、まずは自社の活動の中で近いものを探してみてください。

SDGsのゴールは2030年ですけれど、電材業界の歩みに終わりはありません。ゴーールのその先を目指して、これからも共に頑張りましょう。皆さま、長い時間ありがとうございました。

